

パーカー氏の改良－『サンディトン』

中 尾 真 理*

Mr. Parker's Improvements: Jane Austen's *Sanditon*

Mari NAKAO

要 旨

ジェイン・オースティンの最後の作品『サンディトン』はわずか12章の断片ながら、新しい方向性を示した作品と言われている。特に、作品の舞台が海浜の保養地という設定になっているのが、いかにも「摂政時代」風である。「投機」「消費」「健康志向」「病氣ノイローゼ」「貸本屋」など、時代を表すキー・ワードにも事欠かない。

しかし、『サンディトン』は本当に作者が新しい局面を開こうとした意欲的な作品なのだろうか？『マンスフィールド・パーク』『エマ』『説得』などの作品で積み重ねてきたオースティンの世界は、『サンディトン』ではまったく継承されていないのだろうか？

本稿は以上の問題について（1）土地の改良、（2）ヒロインの人物像の2点からの検証を試みたものである。

（一）二つの評価

ジェイン・オースティン (Jane Austen) は亡くなる数カ月前に『サンディトン (*Sanditon*)』を書き始めたが、二カ月後もたたないうちにその執筆を断念しなければならなくなった。一年前から患っていたアディソン病が悪化したためである。そのために *Sanditon* はたった12章で中断された。

断片としか言いようのないこの未完の作品について、これまでの批評家の意見は二通りあるように思われる。まず、この作品がオースティンの他の小説の六分の一ほどの長さしかないの¹⁾、そこから全体像を俯瞰するのは難しいということは誰もが認めたい話なのだが、ひとつにはオースティンはこれまでにない新しい試みをしているという意見。また、二つ目には、ロマンティックな感情を重視した前作『説得 (*Persuasion*)』の後で再び理知的で皮肉なスタイルに戻ったという意見である。

初めの方の意見としてはまず、‘She has grown too familiar with the ways of her world;’、

そして‘There is a new element in *Persuasion*,’ という例のヴァージニア・ウルフの晩年のオースティンに対する評 (*The Common Reader*, 1925) がある。(もっともこれは特に『サンディトン』に言及したというわけではない) E. M. フォースターも作品の舞台が海浜 (sea-front) にあることに注目し、「地形半分、ロマンス半分という二種類の雰囲気 ‘a double-flavoured taste—half topography, half romance’²¹⁾」が醸し出されていることに新しさを感じている。しかし事件や登場人物については、これまでの作品の繰り返しにすぎず、肝心の機知も鈍ってしまっていると、作品にオースティンの病気の影響があることを認めての論評である。次にマーガレット・ドラブルはペンギン版の序文で、この作品は「Sanditon それ自身が体現している変化の気風 (spirit of change) を表している (アンダーラインは筆者)」と述べている²²⁾。以上は『サンディトン』に新しい境地が開かれたことを積極的に評価しようという意見である。

もう一方の評価は、デイヴィッド・セシル (David Cecil)²³⁾ やレイチェル・トリケット (Rachel Trickett)²⁴⁾ のようなやや古い時代の人たちの意見で、オースティンは最後の作品『サンディトン』で彼女本来の領域である風刺喜劇のスタイルに戻ったというものである。病人をめぐる風刺、過度にロマンティックな文学作品の流行に対する風刺が一、五、七、八、九章と、小説のかなりの部分を占めていること、またその風刺も少女のころの習作を思わせる辛辣かつ未消化なものである (R. Trickett) というのがその主な論拠である。中でも A. W. リッツ (A. Walton Litz) は『サンディトン』執筆のわずか一年前に書いた「小説の構想 (‘Plan of a Novel’)」——ロマンティック小説の典型を構想するという形で発表の意図がないまま書かれたパーレスク風の覚書——の存在と結びつけ、オースティンは病気からくる気鬱を追い払うために「個人的な慰め」として『サンディトン』を書いたのではないかと考えている²⁵⁾。

以上二種類の評価は決してもう一方の意見を全面的に否定するものではなく、互いに他方の意見を半ば認めたくうえでどちらかに力点を置くという程度の違いである。

ところで、最近では上記二通りの意見のうち最初の方、つまり『サンディトン』に新しい方向性を認める考え方に沿った研究が次々となされている。しかも歴史社会学的な観点からの研究に注目が集まっている。それには近年「摂政時代 (Regency)」という歴史的な時代区分への関心が深まったこととも関係があるようだ。「摂政時代」はそれまでのイギリスにない新しい消費型の社会を生んだ。その時代に人気を集めた海辺の保養地を舞台とする『サンディトン』にも新しい時代の影²⁶⁾が読み取れるというのがそれらの研究の態度である。

なるほど歴史的に見ると、オースティンが作家として活躍したのはちょうどイギリスの摂政時代 (1811—20年) にあたる。この時代は摂政皇太子の派手な振る舞いやブライトンその他の保養地の隆盛が物語るように、その後のヴィクトリア時代 (1837—1901年) の堅苦しい道徳観念とも、またそれ以前の時代の道徳観念とも違う特別な風潮をもった時代と考えられる。消費生活の重要性、リゾート社会の到来など、これまでの社会にはない新しい現象が生まれた時代でもある。このようにこの時代の特徴に焦点をあて、そこからオースティンの小説を眺め直そうというのが、最近のオースティン研究の流れである²⁷⁾。

確かに『サンディトン』はオースティンの作品の中でも、最も新しく、最も「摂政時代風」な題材を扱っている。『サンディトン』の新しい方向性を研究することで、これまでどちらかというと農村の保守的な地主階級のモラルを表していると考えられてきたオースティンの世界に新たな広がりが見いだされるかもしれないという期待もわいてくる。『サンディトン』が注目される所以である。

摂政時代はわずか10年という短い期間ながら、経済の変革期であった。「レジャーブーム」「投機」「消費」「リゾート」「健康志向」「病氣ノイローゼ (hypochondria)」などの今日的な

キー・ワードが、そのまま摂政時代の特色をあらわすものとして使用可能である。21世紀を目前に控えた現代の読者にとっても、「摂政時代」の意味するところはひどく魅惑的である。

とはいえ、これまで安定した農村地主の世界のみを描いてきたオースティンが晩年になってようやくイギリス社会の変革に気づき、この作品によってディケンズやジョージ・エリオットのような社会派小説家に変貌する可能性もあったのではないか——もし生きていればの話だが——と言うのは短絡的にすぎるだろう。いったい『サンディトン』に新局面がうかがえるとして、それはどの程度のものなのだろうか。本稿は、この疑問に答えるために、『サンディトン』を読み直してみることにする。田舎を離れ、舞台を当世風の海水浴場に移した『サンディトン』では、『マンスフィールド・パーク (Mansfield Park)』『エマ (Emma)』『説得』などの先行作品に示されていたオースティン的な世界は継承されなかったのか。また、継承されなかったとして、どのようにして突如『サンディトン』において、これまでのオースティンの世界が「摂政時代風世界」に「変貌」してしまったのか、あるいは「変貌」などしていないのか、という点について考えてみたい。

方法としては、これまでの作品の中心的テーマであった(1)土地の改良と、(2)ヒロインの2点を手掛かりに検討を進めていくことにする。

(二) さまざまな改良

オースティンが描くのは田舎に土地と邸宅を持ち、しかも一定の年収があって暮らしている、いわゆるジェントリー階級の家族である。オースティンはどの作品でもそうした田舎の地主の一家をとりあげ、その存続と継承の問題に多大の関心を払ってきた。地主であるからには一家の繁栄は土地の経営と密接に結びついている。家長は土地を改良し、よりうまく土地を経営することによって、一家の繁栄を願った。「改良 (improvements)」というのは、農村の土地の経営をうまく改良して収入を上げるという意味で、農業革命の一環でもあったが、より芸術的な方面では地主たちが領地や庭園を「絵画風 (picturesque)」に「改良」するということを意味していた。オースティンはW. ギルピン (William Gilpin) の著作を通じて picturesque の流行には深い関心を抱いており、どの作品でも地主たちの邸宅とその土地がうまく調和して「絵画のような趣き」を醸して出しているかどうかには注意を払っていた。ちょうど造園の世界では、人工的な装飾美を排除した「自然の美」がもてはやされ、フランス風整形形式庭園からもっと自然で英国風な風景式庭園 (英国式庭園) への改修が盛んに行われていた時代である。

オースティンは作品の中で地主たちの邸宅や庭園、それを囲むパークの景観の美しさを、そこに住む人の内面を示す象徴としてよく利用した。例えば『自負と偏見 (Pride and Prejudice)』のエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) は「自然の美がつまらない趣味などで損なわれていない」(Vol. III, Chap.1) ペンバリー屋敷の堂々とした美しい景観を見て、その所有者であるダーシー氏 (Mr. Darcy) の人格の高潔さを納得する。ペンバリー屋敷の「自然の美」が決して自然の賜物などではなく、Mr. Darcy の手で整備され、維持されていることを Elizabeth はよく知っていたからである。

『ノーサンガー・アベイ (Northanger Abbey)』のティルニー將軍は自邸のすべて——台所も例外ではない——をくまなく機能的に改良している。彼は菜園や温室にもぜいたくな設備投資をして、常に最新の流行を取り入れる有能な土地経営者である。

Mansfield Park では庭園の改良が題材のひとつに取り上げられ、庭を「絵画風 (ピクチャレスク)」に改良することに熱中する人々の様子が描き出されていた。お金の力で有名な造園

家を雇って庭を改良しようとする Mr. Rushworth、改良といっても自分の手で改良するのではなくれば意味がないと考える Edmund、流行に敏感なあまり自邸の庭をとくに改良してしまった Mr. Crawford などである。

Emma の Mr. Knightley は William Larkins を右腕に、たえず自分の農場の改良に努めている模範的な地主であるが、*Persuasion* の Sir Walter Elliot は自分の土地の改良を怠った感心しない地主の例である。そのために彼は経済的に行き詰まり、先祖伝来の屋敷を他人に貸さなければやっていけないはめに陥ってしまった。*Emma* の Mr. Knightley は地方判事として地域の防犯や福祉にたえず力を注いでいるが、Sir Walter は村人に対する最低限の地主の義務でさえ、娘の Anne に任せている始末である。

オースティンはまた、改良という言葉を地所や庭の改良の範囲に止めず、登場人物の性格を改良するという意味でも用いている。*Mansfield Park* の第三部では Mr. Crawford が Fanny に求婚し、良心的な地主に生まれ変わろうとするが、この場合、(代理人任せだった土地の経営を自分の手で行うという形での) 土地の改良は彼の人格の改良にも通じるわけである。もっとも、この感心な計画は結局、途中で投げ出されてしまうのだが。

(三) Mr. Parker の改良

「改良」についてのオースティンの考えが以上のようなものであるとすると、*Sanditon* に登場する地主(作中のオースティンの用語によると Land Holder) Mr. Parker が行っている、*Sanditon* を当世風の海水浴場 (fashionable Bathing-place) として売り出そうという一大計画も、地主の改良のひとつと考えられるのではないだろうか。この計画についてテキストは、次のように説明している。

Sanditon was a second Wife & 4 Children to him——hardly less Dear——& certainly more engrossing. ——He could talk of it for ever. ——It had indeed the highest claims; ——not only those of Birthplace, Property, and Home, ——it was his Mine, his Lottery, his Speculation & his Hobby Horse; his Occupation his Hope & his Futurity. —— (Chap.2, p.372) (アンダーラインは筆者)

これは Mr. Parker が新しく知り合いになった Heywood 一家に向って、自分が今推進中の海岸の保養地 *Sanditon* の建設について熱っぽく語る場面である。*Sanditon*こそ彼の情熱のすべてであり、彼の仕事であり、彼の希望、彼の未来であったという。「彼の投機であり、道楽であった」という言葉が使われていることが注意をひく。この作品では speculation という言葉は実に頻繁に使われるのである。

Mr. Parker は「立派な家のお出で、大金持ちというほどではないが気楽な身分の人で——職業にはついていなかった」(Chap.2, p.371)。その彼が住み慣れた屋敷を捨て、住まいを海岸沿いに移し、その *Sanditon* 村をブライトンやイーストボーンに匹敵するようなファッションブルなリゾート地に変身させようと奮闘する。財産のある彼にとってそれは「投機」であり、しかも「道楽」でもあったのだろう。General Tilney にとって菜園作りが道楽であったのと同じ意味で、サンディトンを保養地として売り出すことが彼の道楽だったのである。*Sanditon* 村と、Mr. Parker が *Sanditon* 村を開発した経緯については、次のように説明される。

A very few years ago, & it had been a quiet Village of no pretensions; but some natural advantages in its position & some accidental circumstances having suggested to himself, & the other principal Land Holder, the probability of its' becoming a profitable Speculation, they had engaged in it & planned & built, & praised & puffed, & raised it to a Something of young Renown—— (Chap.2, p.371) (アンダーラインは筆者)

もうひとりの主だった地主 (the other principal Land Holder) とは Lady Denham のことである。投資家としての Lady Denham を、相棒である Mr. Parker はこう評している。

She has a fine active mind, as well as a fine healthy frame for a Woman of 70, & enters into the improvement of Sanditon with a spirit truly admirable—— though now & then, a Littleness will appear. She cannot look forward quite as I would have her —— & takes alarm at a trifling present expense, without considering what returns it will make her in a year or two. (Chap.3, p.376) (アンダーラインは筆者)

Mr. Parker によると、Lady Denham は70歳という年齢にしては健康で活動的だが、お金に執着するあまり、こせこせしたところがある。目前の経費にこだわるあまり、1、2年後にそれがどれほどの利益をもたらすかということに思い至らないのだ、というのである。

ここで Mr. Parker が語っているのは、今は多少の経費をかけて Sanditon を「改良」し、1、2年後に利益を回収しようという、いかにも投資家らしい考えである。このように見て行くと、Mr. Parker は先祖伝来の土地と屋敷を捨てて、流行と消費のリゾート村建設に乗り出した、新しいタイプの地主資本家の典型のように思われる。Oliver MacDonagh や Roger Sales が用いた歴史区分、「摂政時代」という切り方が意味を持つように思われるのはこういう読み方をしたときである。

(四) Sanditon House の位置

Sanditon の開発を思い立った Mr. Parker は、2年前に海岸から2マイル離れたくぼみにある「いかにも住心地のよさそうな家 (very snug-looking Place)」(Chap.4, p.379) を引き払い、海岸沿いにホテルと滞在客用の家具つき住宅 (lodging houses) を何軒か建て、自らも海岸の散歩用テラスの上の見晴らしのよい高台に、トラファルガー・ハウスというモダンな家を建てて移り住んだ。低い土地 (くぼみ) にある旧居が「しっかりと囲いこまれ、樹木も豊富で、庭も果樹園も牧場も豊かに茂り、このような住まいにふさわしい飾りとなっている」(loc. cit.) のに対し、新居の方は「丘の斜面の一番高い地点に建つ小さな瀟洒な建物で、こじんまりとした芝生に立ち、周囲には植えたばかりの若木がぐるりと取り囲んでいる」(Chap.4, p.384) と描写される。

言うまでもないことだが、低い谷間に建っていた古い邸宅を見晴らしのよい高台に移し、古風な左右対称の整形式庭園を新しい風景式庭園に改修 (改良) することが流行したのは18世紀のことである。Mansfield Park で Mr. Rushworth が低い谷間に建つ Sotherton の屋敷をいかにも古臭いもののように眺め——実際、エリザベス朝時代の建物なのだ——「牢獄のようだ」と嘆いていたのが思い出される。従って、Mr. Parker が海を眺める高台へ家移したこと自体は、時代の流行を敏感に反映したものであるとしても、「摂政時代」に特有の風潮という

ほど新しいものではない。すでに18世紀からそういう傾向はあったのである。

それに Mr.Parker は先祖伝来の土地を捨てて Sanditon に移ったのではなく、同じ Sanditon の自分の土地の中で海岸寄りに家を移しただけなのである。じっさい、Mr.Parker 自身、この移転を庭園の改修と同じように「改良」とみなしている。彼にしてみれば、自分の土地をただ大規模に「改良」しただけのことなのだ。Mr. Parker が Charlotte に向かって、弟の Sydney は移転に批判的だと語るところにそれは示されている。

He [Sydney] pretends to laugh at my improvements. (Chap.4, p.382)

低いくぼみにあるもとの屋敷と海岸の高台にある現在の屋敷トラファルガー・ハウスは、実際には2マイルしか離れていない。しかもどちらも Mr. Parker の土地である。Mr. Heywood が生まれてから57年間も Willingden に住み続けているように、Mr. Parker も生まれてから35年間、同じ Sanditon 村に住み続けている。ただ多少奥地にいるか、海岸寄りに出てくるかという違いだけなのだ。

地主としても Mr.Parker は決して無能ではない。彼は Sanditon 村のことをじつによく知っている。例えば、妻の Mrs. Parker はもとの住まいを懐かしく思い、特に庭でとれた豊富な野菜や果物のことを思い出すのだが、Mr. Parker は近所の知り合い (Lady Denham) の庭師に野菜をわけてもらうようなことはやめ、村の食料品店 (old Stringer & his son) で買い物をするようにと助言する (Chap.4, p.382)。

これは一見すると、Mr.Parker がおおかえの庭師に必要な野菜を栽培させていた昔の生活を旧式なものと考え、必要なものは店で買う新しいスタイル (消費生活様式) に切り替えようとしているのだとも受けとれる。だが、食料品店の経営者 Old Stringer とその息子は Mr. Parker の土地の借地人であることを考えれば、彼が地主として借地人の生活を思いやるのになんの不思議もない。まして Mr. Parker は Old Stringer に保養客目当ての店を出すように薦めたという経緯がある。「Sanditon 開発計画」の事業主として、食料品店のその後の成り行きに責任を感じるのは当たり前である。

Mr. Parker は確かに時代の趨勢に敏感な、新しい型の地主である。だが、かつての封建時代的な農村地主としての役割をすべて放棄してしまったわけではない。彼は現在も村人たちの生活やその福祉に気を配っており、12章では村の生活困窮者「気の毒なマリンの一家の状況 (the poor Mullins' situation)」に心を痛み、寄付を募ろうと骨を折っている様子が描かれている (Chap.12, p.423)。

同じように見逃すわけにいかない点として、この事業のもうひとりの出資者 Lady Denham の屋敷 Sanditon House と、海岸の保養地との位置関係がある。Lady Denham という女性はいした教育も受けなかったにもかかわらず、若いころ Sanditon の教区に大きな荘園とマナー・ハウスを持つお金持ちと結婚して財産を獲得した。その後、彼女は土地の名士であった Sir Harry Denham と再婚し、レイディの称号も手に入れた。結婚によって財産と社会的地位を手に入れた Lady Denham は (もう70歳であるが) 賢い女性と言えるだろう。(もっとも主人公の Charlotte は Lady Denham を露骨な拝金主義者で、'mean'だと考えている)

この Lady Denham の住む Sanditon House は丘の中腹にある。それは、投機のために建てられた見晴らしのよい lodging houses の立ち並ぶ一帯から少し離れた、古いお屋敷である。だが、距離的に見れば、Sanditon House は海岸からそれほど遠いわけではない。保養客が散歩する海岸のテラスは歩いて行ける距離にあり、Mr. Parker のトラファルガー・ハウスから

もわずか半マイルしか離れていない。要するに Lady Denham の住む古いマナー・ハウスも、Mr. Parker の古い屋敷と同じく Sanditon 村の一部にあって、ホテルや lodging house の客と同じコミュニティを形成しているのだ。逆に言えば、Lady Denham は自宅のすぐ近くに lodging houses を建てて、Mr. Parker の投資計画に一口乗ったというわけである。

このように見てくると Sanditon という海浜の村と、地主の Mr. Parker 家、Lady Denham 家の関係が見えてくるように思われる。Sanditon 村は海辺のリゾート村とは言っても、ブライトンやイーストボーンといった有名海水浴場とは異なり、依然として田舎の小さな村なのである。そのおもだった住人——オースティンのいわゆる「田舎の2、3家族」——は第一に Parker 家であり、第二に Lady Denham 家、さらに財政的には少し苦しいが Sir Edward Denham 家があるわけである。これは Highbery や Longbourne とさして変わらない状況ではないだろうか。General Tilney が「道楽」で庭に最新式の温室やあずまや (tea-house) を作ったように、Mr. Parker も「道楽」でホテルや lodging houses や水浴用の馬車 (machines) を自分の土地にしつらえたのだ。Sanditon に描かれた貸本屋 (library) や海辺の遊歩道は「摂政時代」特有の風俗だが、目新しさといってもその程度で、オースティンの世界を形成する小さな社会の本質は変わっていないのである。

(五) ヒロインとしてシャーロット

次にヒロインの Charlotte を考えてみよう。オースティンは前作 *Persuasion* で、Mrs. Croft という新しい型の女性を登場させた。海軍提督の妻 Mrs. Croft は、「奥様はきっと随分ご旅行をされたのでしょうか？」という田舎地主の妻の問いに対して、次のように答えていたのが印象的だった。

Pretty well, ma'am, in the fifteen years of my marriage; though many women have done more. I have crossed the Atlantic four times, and have been once to the East Indies, and back again; and only once, besides being in different places about home —— Cork, and Lisbon, and Gibraltar. But I never went beyond the Streights —— and never was in the West Indies. We do not call Bermuda or Bahama, you know, the West Indies. (*Persuasion*, Vol. I, Chap.8)

バーミューダは西インド諸島とは言えない、リスボンやジブラルタルはごく近く (about home) だし、東インドへは一度しか行ったことがないと考えるような、視野の大きな勇ましい女性が *Persuasion* には登場していたのである。Mrs. Croft だけではない。*Persuasion* には初めて、職業をもつ女性ルーク看護婦 (nurse Rooke) が登場し、Anne は尊敬の気持ちの交じった好意的な目で見つめていたのだ。その後続く Sanditon であるから、ここでオースティンがどんな新しい女性を描くのか、これも興味のある問題である。

オースティンはこれまでの作品で常にヒロインが自分で考え、判断し、行動することを求めてきた。Henry Tilney の支援を得て一人前の女性に成長する17歳の Catherine Morland を始め、27歳の孤独なヒロイン Anne Elliot まで、オースティンは常にヒロインの精神的な自立の問題に関わってきたとも言える。その間、作品とともにヒロイン像も成長し、特にヒーローとの関係では「教え諭すもの」と「教え導かれるもの」という関係から、対等な関係へ、さらにヒロインの方がヒーローを受けとめる、従来の通念とは逆の関係へと発展してきた。この最後

の場合は、例えば、*Mansfield Park* の Fanny Price と Edmund の関係である。Fanny は始めこそ Edmund に教えられ、全面的に頼っているが、素人芝居以後は Edmund の助言を当てにすることを諦めている。*Persuasion* も同様のケースで、Anne Elliot には最初から頼れる父も、信頼できる相談者もない。このように男性から精神面での援助を期待できなくなったヒロイン像は今後どのように発展していくのだろうか。世界の海を旅行した Mrs. Croft の視野と経験、ルーク看護婦の職業経験、Anne Elliot の静かな自己信頼 (self-reliance)、こうしたものは *Sanditon* のヒロインにどのように生かされ、継承されていくのだろうか、という疑問も当然生じてくる。

残念ながら、*Sanditon* のヒロイン Charlotte Heywood については年齢が22歳、控えめだが冷静な判断のできる女性ということしかわかっていない。なにしろ、12章で終わっているのだ。ヒーローとおぼしき男性の登場もない。Sydney Parker が一応、それらしい存在だが、やっと12章で顔を出しただけで、まだどんな人物になるかわからない。オースティン家に伝わる話では、*Sanditon* の題として作者が考えていたのは *The Brothers* であったという。そうだとすると、Parker 兄弟のひとりの Sydney Parker が、12章以後でかなりの活躍をするだろうということは想像できる。だが、それも想像にすぎない。

Charlotte は早くも7章で、Lady Denham の性格がどうも Mr. Parker の話とくい違おうと悟り、'I must judge for myself.' (Chap.7, p.402) と決心を固めている。彼女は続いて Sir Edward Denham も Arthur Parker もつまらない人間だと見切りをつける。だが、彼女のこのいさぎよい判断は果たして正しいものなのだろうか。どの点から見ても薄幸のヒロインといった風情の若い Clara Brereton と、エネルギッシュで決断力に富む、もう若くない女性たち——Lady Denham と Diana Parker がどう発展していくかも謎である。Clara と Diana Parker の活躍する部分は、対照が余りにも明瞭なパーレスク風どたばた喜劇に終始している。ただ、Charlotte の22歳という年齢は、Anne Elliot ほどではないにしても、これまでのヒロインに比べて高いことには注意をするべきだろう。22歳と言えば丁年をすぎ、作者は当然ながら大人の女性としての責任ある判断と行動を要求するはずだからである。

Margaret Kirkham はその著 *Feminism and Fiction* の中で、病人のふりをしている Mr. Arthur Parker と、精神力と行動力の人 Diana Parker の間には男女の役割の逆転が見てとれると指摘している⁹⁾。このようなことがヒロインの人格形成に何か影響してくるだろうか。もっとも、病人をめぐる風刺の部分は、作者にもし修正の筆を加える機会があれば、恐らくもう少しあっさりとしたものに刈り込まれたのではないだろうか。むしろ、読者として先の展開が楽しみなのは、西インド諸島帰りの17歳の娘、白人と黒人の混血児 (half Mulatto) (Chap.11, p.421)、Miss Lambe の存在である。まったく Margaret Drabble も言う通り、Miss Lambe のような外国人女性がオースティンのイギリス的な世界に登場するなど誰が考えただろうか¹⁰⁾とはいえ、17歳の Miss Lambe ではとても Charlotte の相手にはならないだろうことは、残念ながら確かである。

Miss Lambe の取り扱い方によっては、この小説はその領域を拡大する可能性があると考えてよいのではないだろうか。Miss Lambe が未知の世界の人だからである。当時、Miss Lambe のように西インド諸島の農園経営でひと財産をつくって帰ってきた West Indians について、一般のイギリス人がどのように見ていたかをよく示していると思われるのは次の Mr. Parker の言葉である。

No people spend more freely, I believe, than West Indians. (Chap.6, p.392)

西インド帰りの金持ちは、金の使い方を知らないと言わぬばかりである。Lady Denham も West Indians について、

....and because they have full Purses, [they] fancy themselves equal, may be, to your old Country Families. (Chap.6, p.392)

と言っている。古くからの Country Families と、金の力で紳士になった新興の家族との間に微妙な差を設けたがるのは、Emma Woodhouse に共通する心理である。

(六) 結論として.... Sanditon への投機は成功するか？

Mr. Parker が推進している、Sanditon を海水浴場として売り出す計画は、冒頭の章で彼の馬車が転覆したごとく、おそらく頓挫するだろうというのがおおかたの見方である。Roger Sales などは 'Sanditon is new but already decaying.'¹⁰ としているし、榎本みな子著『オースティンの小説とその周辺』(英宝社)のすぐれた Sanditon 論も、同じように見ている。事実、Charlotte が馬車の窓から見た Sanditon は「貸し家」の札が目立ち、行き交う馬車も人の影も思ったより少なかった(4章)とある。出資者である Lady Denham はせっかく建てた lodging house がなかなかふさがらないことが心配の種となっている。

だが、それにもかかわらず、オースティンはおそらく Sanditon がそれほど大勢の客を集めない、こじんまりとした保養地のままで小説を終了することに何の違和感も覚えなかったと思われる。Roger Sales の言うように、ゆくゆくは大失敗に終わる投機に熱中する Mr. Parker を、作者が皮肉な目で見ているとは考えられないからだ。Mr. Parker は終始、好意的に描かれており、小説は Parker 家を中心に今後も進んでいくだろうと想像される。そして Parker 家、Lady Denham 家、Sir Edward Denham 家を中心に、Miss Lambe や the Miss Beauforts などの少数の保養客たち、そして Willingden の旧式な Heywood 家、これでオースティンにとっては十分な材料であっただろう。Sanditon は Miss Beauforts 姉妹が注目を集める程度の小さな保養地である限り、オースティンの世界であり続けるのである。

以上、地主の「改良」という点から、また、ヒロインの人物像という点から、Sanditon をこれまでの作品と比較しながら検討してみた。確かに Sanditon には、これまでのオースティンの世界には見られなかった社会の変化が描かれている。Mr. Parker の投機熱、投資家としての顔をもつ Lady Denham、貸し本屋 (library)、西インド帰りのお金持ちなど保養地独特の商店の描写、消費とレジャー型の社会、まさに「ジェイン・オースティンが非常に正確な時代の観察者である¹¹」ことを確認させる見事な描写である。そしてその時代が「摂政時代」という時代であることも間違いない。

一方、Sanditon に限らずオースティンの描く社会は相変らず田舎の地主階級に限られている。これは一見、固定した小さな社会のように見えるが、実はかなり変動もあり、さまざまな可能性を含んだ社会でもあった。Raymond Williams が『都会と田舎¹²』11章で見事に要約してみせているように、田舎の地主の家族といってもその出自はさまざま、財産獲得の経緯も運用の方法もそれぞれ違うのだ。Mansfield Park の准男爵 Bertram 家でさえ、西インドの Antigua 島で農園を営んでいる点では西インド帰りと何ら違うところはない。オースティ

ンの田舎の「2、3家族」はたえず自分たちの土地を「改良」し、「道楽」としてその「改良」を楽しみつつ、家の存続をはかってきた。Mr. Parker もその点ではまったく同じなのである。

注

作品の引用はすべて *The Novels of Jane Austen*, (ed.) R.W.Chapman, 3rd Edition (Oxford University Press, 1933) を用いた。

- 1 *Pride and Prejudice* 全60章388頁、*Emma*54章484頁に比べると *Sanditon*12章65頁は約六分の一である。もっとも *Persuasion* は24章252頁だから、この場合は四分の一くらいになる。
- 2 E.M.Forster, *Abinger Harvest*, (Edward Arnold, 1936). See p.178.
- 3 Introduction to *Jane Austen: Lady Susan, the Watsons, Sanditon*. (*The Penguin English Library*, 1974), p.25.
- 4 David Cecil, *A Portrait of Jane Austen* (Hill and Wang, 1978), Chap.9.
- 5 Rachel Trickett, 'Jane Austen's Comedy and the Nineteenth Century'. *Critical Essays on Jane Austen*, (ed.) B.C. Southam (Routledge and Kegan Paul, 1968, 1970)
- 6 A.W.Litz, *Jane Austen: A Study of her Artistic Development* (Oxford, 1965), Chap.VI.
- 7 アンダーラインをした文中二つの語句は神戸女子大学文学部紀要第30巻1997年掲載の湯谷和女先生、及び日本大学経済学研究会研究紀要第24号1997年掲載の安部亮子先生の論文のサブタイトルから拝借させていただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。
- 8 例えば、Oliver MacDonagh, *Jane Austen: Real and Imagined Worlds* (Yale University Press, 1991) や (Roger Sales, *Jane Austen and Representations of Regency England*. (Routledge, 1994) など。
- 9 Margaret Kirkham, *Feminism and Fiction* (Athlone, 1997), p.157.
- 10 Margaret Drabble in her introduction to *Jane Austen: Lady Susan, the Watsons, Sanditon*. (Penguin, 1974).
- 11 Roger Sales, *Jane Austen and Representations of Regency England*, p.206.
- 12 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』(英宝社)「サンディトナーその背景」
- 13 Raymond Williams, *The Country and the City* (Chatto and Windus, 1973), Chap.11. 邦訳『都会と田舎』山本和平・増田秀男・小川雅魚訳(晶文社)

Summary

It is generally acknowledged that *Sanditon*, Jane Austen's last novel, is different in many ways from her previous works. Though small of merit, for what we have is only a fragment of a novel as the author stopped writing at its twelfth chapter, it is of great interest to those who have read all her preceding novels.

There are signs of new development especially in her materials. Opening with a carriage accident, an enthusiastic leading character (Mr. Parker), his investment in the sea-side resort, a West Indian young lady (Miss Lambe) and, amongst all others, the romantic atmosphere of the sea; these are examples of new elements which indicate a change. Critics of recent days who are historically minded recognize the period's features of Regency England in those materials. They even suggest that themes such as 'health-care',

'speculation', 'expansion of bathing-places' and 'rapid change of economic system' indicate a Regency crisis.

On the other hand, it is also certain that in her handling of imaginary invalids and over-energetic persons Jane Austen returns to her earlier works. In character-drawing, too, we find her usual mocking exaggerated comic tone which is reminiscent of her juvenile compositions. This means retreat, perhaps because of her declining health.

How then, should we take this incongruity? Is there any thing essentially new in her last work?

I would answer yes, though not in the same meaning as historians who want to find typical symptoms of Regency England.

I intend to discuss this query along a rather orthodox line, concentrating firstly on 'improvements of their estates by land holders', and secondly on 'the heroine's spiritual development'.

